巻頭特集

高知工科大学開学20周年

地域に開かれ、地域と共に――。「人が育つ大学」を目指す。

大学時代は自分を大きく成長させる時期です。どこで、誰と、どのように過ごすのか。大学の教育システムや設備などの環境はもちろん、取り巻く地域や人、自然の豊かさの中で、高知工科大学生はどのように育ってきたのでしょう。開学当時から現在まで、大学生を見つめてきた方々を中心にお話をお聞きしました。

▲2016年10月15、16日に行われた第20回大学祭のテーマは「JUMP」。そして第21回は「Remake」に。今秋が楽しみですね

沿革

- ●1992(平成4)年　6月
  - ・高知県工科系大学(工学部)構想検討委員会設置
- ●1997(平成9)年　4月
  - ・高知工科大学開学
- ●1999(平成11)年　4月
  - ・大学院工学研究科開設
- ●2008(平成20)年　4月
  - ・マネジメント学部設置
- ●2009(平成21)年　4月
  - ・公立大学法人高知工科大学設立
  - ・工学部再編(学群・専攻制に移行、システム工学群、環境理工学群、情報学群設置)
- ●2015(平成27)年　4月
  - ・高知県公立大学法人と法人統合
  - ・マネジメント学部を永国寺キャンパスに移転、経済・マネジメント学群設置

20th Anniversary
Kochi University of Technology
志の旗をより高く

開学当時から塀も門もない地域に開かれた大学

寺村 勉さん
Teramura Tsutomu
・香美市商工会 会長
・株式会社テラムラ(寺村葬儀社)代表取締役

1997(平成9)年4月、県初の工科系大学として、高知工科大学は開学しました。県が設置し学校法人が運営する公設民営の形でスタート、2009(平成21)年には、日本で初めて私立大学から公立大学へと移行し、2015(平成27)年には高知県立大学と法人統合するなど、大きな変革を遂げてきました。

現在、工科大の地域連携機構副機構長・地域共生センター長を務める浜田正彦さんは、県職員として大学設置の準備に関わり、その後に大学に移り学生支援課などを経て今に至ります。「1995(平成7)年から大学に関わってきました。このあたりは当時、林業試験場でね。ここが選ばれたのは、空港からも近く、16haという広さが確保できたことが大きい。開学当時から大学に塀や門はないのが特徴です。それは大学が地域に開放されている証です」と浜田さん。市町村合併前の土佐山田町で商工会副会長だった寺村 勉さん(現:香美市商工会会長)は、「土佐山田に大学がきたらどうなるろうねといろいろな所でよく話しましたね。商工会としては地元と大学をどう繋げていくか。そこで大学の売店の運営を商工会が担当したいと伝え、それが今の売店の『アクセス』となります」。

大学と隣接する鏡野公園からの境目もなく、広い構内は朝夕の散歩で地域住民が通り抜けたり、大学の南西にある片地小学校への通学路にもなったり。芝の広場は整然として美しく、教室を目指し敷地内を自転車で横切る学生の姿も見えません。「それはね、初代学長が自転車置き場を利用し、徒歩で行くことを推奨したからなんですよ」と浜田さん。

大学祭は地域の祭り会場のお隣で、同じ日に開催

第1期生で、現在は大学事務局の学生支援課課長代理の井村公一さんは、入学の歓迎イベントが印象に残っているといいます。「商工会のみなさんが入学式当日にキャンパス内で開いてくれました。町を挙げて熱く迎えてくれましたね」。寺村さんは「大学のある香美市土佐山田町は学生さんの生活の場になるでしょ。もっともっと土佐山田を知ってもらいたい、学生さんと一緒に町を盛り上げていきましょうという気持ちでした」。その思いは、学生の「土佐山田まつり」への参加にもつながっていきます。

大学祭を地元のお祭り「刃物まつり」と連携して開催するのも初年度から。浜田さんは「1期生569人だけでの大学祭の企画立ち上げは大変だ。それなら商工会と協力してやりましょうということになったんですよ」。「といってもすべてを一緒にするのではなく、お隣同士で同じ日に開催しましょう、という感じですね」と井村さん。「私も大学祭実行委員会の代表をしましたが、それぞれが自分たちの『祭』に全力で取り組む。お客さんは、大学祭には学生の両親や友人、刃物まつりには地元を中心に子どもからお年寄りまでがやってくる。で、隣でやっているのなら寄っていこうかな、となる。これが相乗効果を生んだと思います」

浜田 正彦さん
Hamada Masahiko
高知工科大学 地域連携機構
副機構長・地域共生センター長

井村 公一さん
Imura Kouichi
高知工科大学 大学事務局
学生支援課課長代理
※高知工科大学1期生

卒業イベントとして行われている「えん」の地域交流行事も、大学全体で謝恩会のようなものができないかという意見が発端。「『土佐のおきゃく』みたいなものができたらいいねと。でも僕たちだけではどうやったらよいのかわからない。商工会のみなさんに聞いてみたら、じゃあ手伝うよということになった。これも1期生を送り出した2001(平成13)年から続いているイベントです。地元の人にも卒業を祝ってもらえるんですよ」。えんは、縁のえん、円のえん、そして宴のえん……。

商工会を中心とする町の人々との関係は、大学祭だけには留まりません。大学祭実行委員会平成27年度副代表の矢野大河さんは、「商工会の会議に参加したり、地元・香美市のえびす昭和横町のお祭りを手伝ったりと交流は深まりましたね。自分が気づいていないだけで、きっと多くの方と関われて、人間的に成長できたのではと思います」。同じく代表の島内佑規さんも「他の大学であれば、地域の方々と触れ合う機会は少ないし、そしてそれは普通かもしれません。でも僕は土佐山田の町で地域の人とすれ違えば、おはようございますとかこんにちはとか、ごく自然に挨拶したり、話をしたりしていますね」。

「大学は限られた世界。この時期に、大学内だけでなく外に出て、外部の人との接点を持ち、交流し、話したり聞いたり考えたりする経験は学生にとって貴重なことです。3年次のインターンシップはもちろん、課外活動などでの経験が、社会人としての成長につながっていくのです」と井村さん。そして「地域の方に講師として来ていただき環境や産業の話をしてもらうなどがありますが、大学は画一的なプログラムは作っていません。地域に出ていくための道すじやきっかけは作りますが、あとは学生の自主性です」と続けます。浜田さんも「学生たちは大学の外に出て、地域と協力しながらいろいろと作り出していますよ。多言語アプリや航空研究などが代表的ですね」。

矢野 大河さん
Yano Taiga
高知工科大学
大学祭実行委員会平成27年度副代表
マネジメント学部4年

島内 佑規さん
Shimanouchi Yuuki
高知工科大学
大学祭実行委員会平成27年度代表
システム工学群4年

20周年、そしてこれから

寺村さんは「たとえば畜産系の大学なら牛を育てるフィールドが必要ですよね。じゃあ工科大なら、フィールドを香美市全体として考えて実験場として使えないかなと、商工会などで話すことがあります」。地元と大学の関係、まだまだ深まりそうです。

井村さんは「『オープン』という大学の思想は、例えば学内なら実験室の様子が見られる研究室の廊下や、ガラス張りの教員室にも表れていると思いますね。外部に向けては、もっともっと多くの人に大学に来てほしい。たとえば大学図書館は利用登録をすれば誰でも本が借りられますし、大学食堂もあります。大学だという気持ちのハードルを低くして、公開講座などの主催イベントにも気軽に参加していただきたいですね」。そして「春は桜、夏はよさこい、秋は大学祭、冬はイルミネーション」と、大学の名物を見に来てほしいです。だれでも気軽に入れるキャンパスは、全国でもそうはないですよ」と浜田さん。

高知工科大学の教育システムはもちろん、地域との関わりも、工科大生が大きく育つ要因となっているようです。